

初心忘るべからず

村田 勝敬

■ プロローグ

小学低学年の雑誌付録のカルタに「桜が咲く頃一年生」というのがあったように記憶している。40年くらい前のこと、郷里の祖父の墓前で桜花を見てから夜行寝台<出雲>に乗り、東京武蔵野の一角で散りゆく桜花を眺め、その後仙台に移動して三度目の花見をした。これが人生を決定的に変え、それまで学んできた電気工学からの決別の瞬間であった。ところで、季語に関するこの種の常識が通用しない地域が存在することを知ったのは当地に移住してからだ。四月初旬から中旬にかけて、水芭蕉、座禅草、福寿草、片栗の花が次々と咲き、大型連休前あたりになって桜と梅が同時に花開く。これが秋田の春の風物詩である。

■ デンキの話

小学4年生の頃に『エジソンの伝記』を買って貰い、ボロボロになるまで読み返した。その後、電源トランス、抵抗器、真空管、スピーカー、ブラウン管といった、音を出したり、光熱を発したり、画像を投影するものの、眼に見えない“電気”の実体に非なる関心を抱いた。それが電気工学を学びたいという願望に変わり、進路に直結した。高校1年時に一生懸命勉強していた古文を捨て、ひたすら数学と物理化学の勉強に専念した。傍らで物理クラブに入部して電気工作と“はためき現象”の解析をやった。入試科目に古文のない国立大学を目指したが、悲願叶わず私立大学に身を寄せることとなった。



嘗てクニマスが生息していた田沢湖より眺望せる駒ヶ岳や乳頭岳

私が通っていた大学の機械工学科の一教室では義手ロボットを製作していた。スイッチ釦を押せば、大方の人の手、前腕、上腕の動きができる水準になっていたという。義手として機能するには、人間の神経とロボットのスイッチ系統を連結しなくてはならない。すなわち、人の動作意思を義手ロボットの動きに変換できなければ、何の役にも立たないのである。しかし、そこが工学の限界であった。私は電気工学を勉強していたので電気回路学や制御システムなどについての知識は多少あったものの、人体の仕組み、とりわけ神経科学に関して無知だった。

■ デンキから神経へ

学生時代には、家庭教師の他に、学習塾事務員、マンション建設現場のコンクリート屑搬送夫や床清掃夫、24時間勤務の警備員、朝から夕方まで自動コンベアで移動してくる電気毛布をビニール袋に詰める梱包作業員などをやった。アルバイトの稼ぎの大半は目白台下の神田川近くにあった居酒屋<辨慶>に消えたが、職場経験は現在の私の血肉となった。

仙台に移ってからの教養時代はオーディオ研に所属し、人体の神経刺激装置を先輩に製作して貰った。夕方になると、同じサークル棟内の化学部員のひとりに被験者となって貰い電気刺激強度と感覚尺度との関係を調べた。いわば、神経生理学と認知心理学を合わせた研究モドキをやっていた。不思議な縁があったとすれば、それから6年後に、再び人の末梢神経伝導速度、大脳誘発電位、心電図心拍変動を測定することになったことであろう。すなわち、鉛作業、振動工具作業、有機溶剤作業、データ入力作業、交替制勤務作業など産業現場で働く人々を対象に神経生理学的検査を行い、環境有害因子による無症候性（臨床症状が現れていない）神経影響を評価する礎を築く契機となった。

■ 神経から環境保健へ

神経生理学的検査の長所は、被験者の主観的訴えによらず、生体異状を客観的に評価できる点である。

これに対し、手足口の知覚異常、運動失調、難聴等を主な徴候とする水俣病の場合、「魚を食べた」、「痺れる」、「歩けない」、「聞こえない」などが確認されると患者と診断された。真に症状を有する患者も多数いたが、「疾病と認定されると補償金が出る」となれば、症状を真似て医師に訴えるという短絡的構図も一人歩きする（この種の病気を“詐病”という）。水俣病患者認定訴訟が延々と続いた理由は、原因物質であるメチル水銀の同定に3年以上の年月を費やし、結果としてメチル水銀の（生物学的半減期は約70日と短いため）個人曝露評価ができず、しかも客観的診断法が当時確立されていなかったことにある。

出生から成人するまで対象者を追跡し、健康事象を観察する方法を“出生コホート研究”という。北大西洋上に浮かぶフェロー諸島でメチル水銀濃度の高い鯨を食べた母親から生まれた7歳児（その後14歳時）に対して、私は大脳誘発電位や心拍変動の検査を実施してきた。その結果、出生時のメチル水銀曝露濃度が高いほど神経生理学的異常が出現しやすいという関係を認めた。もっとも、体性感覚誘発電位や神経伝導速度の検査はフェロー諸島では使用

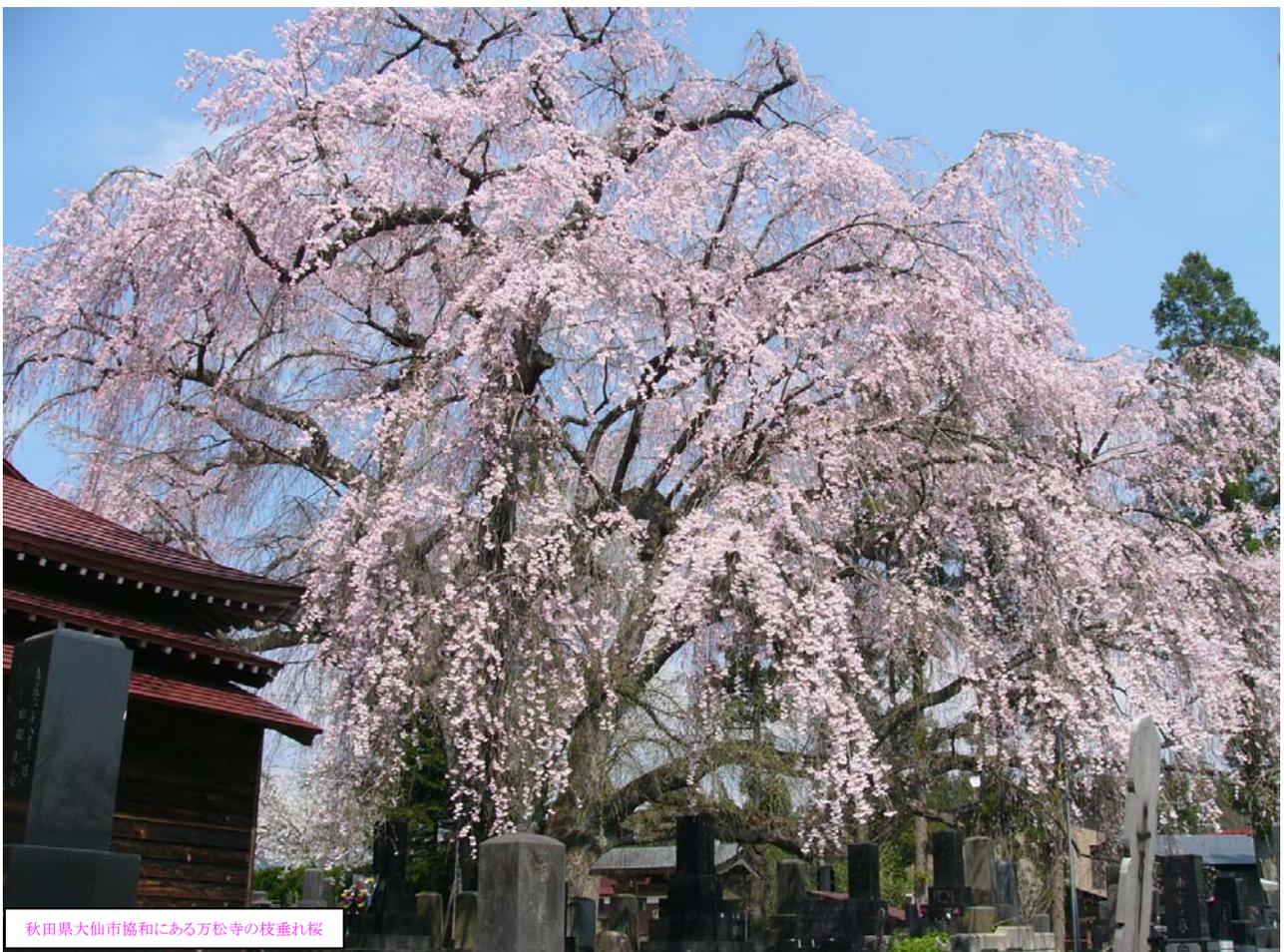
されなかった。これらの検査は電気ショックで末梢神経を刺激するので、小児には不向きと判断されたためである。

■ エピローグ

学童期の“デンキ”に寄せた思いは“神経”に変わった。ともに姿形は見えないけれど、エネルギーや情報を伝える。一方で、これらが滞ると世の中が真っ暗になってしまう。つまらぬ共通性を思い浮かべながら、初心を貫いてきたのではないかと納得する自分を嘲笑した。所詮、いまだ道半ばなのに…。

若人が集う秋田の春はこれからである。暫くして秋田市千秋公園の桜が咲き、そのあと角館の桧木内川土手の染井吉野や武家屋敷周辺の枝垂れ桜が満開となる。真っ盛りのピンク色は艶やかであるが、小野小町の歌にある「花の色はうつりにけり」の如く、色褪せて白くなっていく桜花を愛でるのも一興である。その下で、自らの初心は何なのか今一度問い直し、その先の自分を想像してみよう。案外、その初心が30年、40年先まで生きているかもしれない。

「秋大生活のひろば」No. 142(2013年4月刊)



秋田県大仙市協和にある万松寺の枝垂れ桜